

●注目すべき遺物

今回の調査では主に飛鳥時代（7世紀）から室町時代初めごろ（14世紀）の遺物が出土しました。

なかでも注目される遺物が、銅印と須恵器の硯です。

銅印

12河川の東岸あたりで見つかりました。県内では5例目の発見ですが、発掘調査によって出土場所が特定できたのは今回がはじめてのことです。

印面は一辺約3cmの正方形、高さも約3cmで、つまみにはひもを通すための穴が開けられています。

印面の文字は篆書体の「木」と考えられ、一字の印は貴族などが使った「私印」に多いとされています。



鳥取県内で出土した銅印一覧表

出土・採集地	印面の大きさ (縦×横・cm)	印の高さ (cm)	印の文字	出土形態	所蔵
伯耆町大殿	3.0×3.0	3.1	良	採集	個人蔵
大山町長者原	3.3×3.3	3.55	財	採集	名和神社
琴浦町斎尾廃寺跡	2.2×2.2	2.8	財	採集	鳥取県立博物館
倉吉市穴窪	3.0×2.9	2.7	有	採集	倉吉博物館
鳥取市高住平田遺跡	3.0×3.1	3.05	木	発掘調査	

硯

墨をするところが円く、直径が約18cmあります。真ん中の平らな部分で墨をすって、できた墨汁を周りの溝にためて使いました。

飛鳥～奈良時代（7～8世紀）のものと考えられます。



硯の復元図

●まとめ

今回の調査では、川や溝が見つかったものの、建物跡などは確認できませんでした。

しかし、多くの遺物が出土し、この地域の歴史を考える上で重要な発見がありました。

銅印は、奈良時代（8世紀初めごろ）から国や役所で使われるようになり、その後、奈良時代の終わりごろ（8世紀後半）には、寺院や地域の有力者たちも使うようになったとされます。しかし、印を使う人々はまだ限られていました。

今回の調査において、銅印とともに墨書土器や硯が出土したことをあわせると、奈良～平安時代の遺跡周辺には、文書を作成する必要があった役所や寺院に関連する施設が存在していた可能性が考えられます。また、飛鳥時代までは農具などの存在から、水田などの耕作地に近い場所であったことがうかがえ、この地域の古代における変遷が明らかになってきました。

高住平田遺跡の調査

鳥取県教育文化財団調査室 美和調査事務所
〒680-1133 鳥取市源太 12 番地 (旧鳥取湖陵高校美和分校内)
TEL : 0857-51-7553 FAX : 0857-51-7550
メールアドレス : matsui@pref.tottori.jp
ホームページ : <http://business4.plala.or.jp/kyo-bun/>



●はじめに

財団法人鳥取県教育文化財団では、昨年度から一般国道9号（鳥取西道路）の改築工事に伴う発掘調査を実施しています。

今年度の調査地のひとつ、鳥取市高住にある高住平田遺跡は、湖山池の南側に位置し、東西を丘陵に挟まれた谷筋にあります。調査地点は西側の丘陵裾にあたり、この丘陵では弥生時代中期（紀元前1世紀ごろ）の銅鐸がみつかっています。

今回、高住地区では初めてとなる広範囲の発掘調査を行い、飛鳥時代（7世紀）から室町時代初めごろ（14世紀）までの遺構と遺物が見つかりました。なかには、墨書土器や硯、さらに県内では5例目となる銅印などがあり、この地域の歴史を知るうえで重要な手掛かりを得ることができました。

このたびの調査で明らかになってきた、この地域の昔のようすをご紹介します。



調査区を南上空から見たようす

● みつかった遺構

主なものとして、2本の川と、川岸につくられた溝があります。

21 溝

12 河川西岸の中段にある平坦地に造られていました。幅は約 1 m、長さ約 13mあります。12 河川とつながっていて、川から流れこんだ水が再び川に戻っていったと考えています。



21 溝を南からようす

溝からは飛鳥時代（7世紀初めごろ）の土器がたくさん出土したほか、木製農具もみつかりました。



幅約 40cmの木製農具です。1本は折れていますが、9本の歯が取り付けられていて、真ん中の穴に柄を付けたようです。

農具の復元想像図

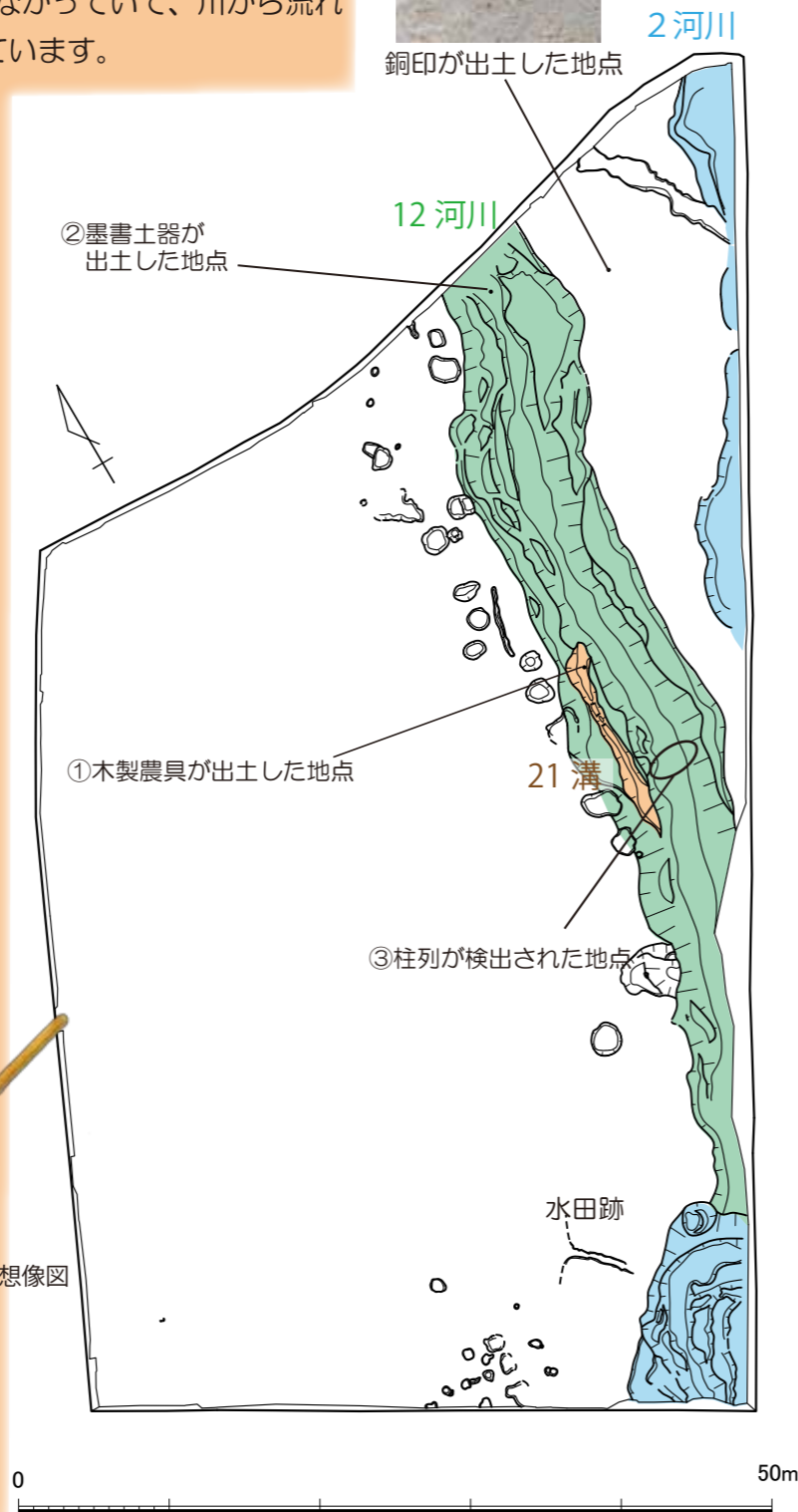
このような農具は全国でも4例（静岡・福岡県の3遺跡）しか見つかっておらず、貴重な発見となりました。

右の写真は、地層の断面です。下にある白い粘土が吹きあがるように上の土とかき混ぜられています。これは土が地震によって乱されたためにできたものです。

調査区の西側では、こうした土の乱れが著しいこともあって、遺構はほとんどみつかりませんでした。



銅印が出土した地点



②墨書土器が出土した地点

①木製農具が出土した地点

③柱列が検出された地点

水田跡

0 50m (S=1/500)



12 河川

調査区の東側でみつかった川です。最大幅が約 10m、深さ約 2mで、約 70m分を確認しました。川は7世紀頃から流れていたと考えています。それが、上流から運ばれてきた土砂によって埋まった後、鎌倉時代（12～13世紀ごろ）に再び、幅の狭い溝を掘り直していることがわかりました。



土器が出土したようす



川の中からは、飛鳥時代から鎌倉時代にかけての土器がたくさん出土しました。なかには、ほとんど割れていないものもあり、数個まとまるところもあります。こうした状況から、土器がわざと投げ入れられたのではないかと考えていますが、その理由はわかりません。



墨書土器が出土したようす

墨書を拡大した写真

出土した遺物の中には、文字や記号の記された土器がありました。

例えば、平安時代前期（9世紀末から10世紀初めごろ）の杯の底には文字が書かれていました。一部が欠けているものの、「深縁」と読み取ることができます。

また、奈良時代（7世紀末から8世紀）の須恵器の中には、漆で記号が描かれたものもありました。

描かれていたのは全て蓋で、つまみのところに「×」や「△」といった記号がみられます。



漆で描かれた記号のある須恵器



川底に立てられた柱列

川底には4本の丸太が立てられていました。直径 20～30cmの丸太は川の流に直交するように並んでいました。

柱の先端が川岸の上面とほぼ同じであることや、川をせき止めるような部材がみつからなかったことから、橋脚だった可能性があります。